

# 探訪

経営者

INTERVIEW



## 「人」、「コト」、「モノ」 コンダクター を繋ぐ案内人

株式会社エム・イー・シー  
株式会社エム・イー・シー・  
テクノロジー

プラント向けの配管資材等を販売する株式会社エム・イー・シー、そして半導体製造装置の消耗部材等を販売する株式会社エム・イー・シー・テクノロジー。両社は、幅広いネットワークを活用して、お客様のニーズにいち早く応えることで、確かな信頼と実績を積み上げてきました。

今回は、山口康秀社長より、会社の沿革や事業拡大の経緯、そして今後の事業展開についてお話をうかがいました。

### 【会社概要】

会社名 株式会社エム・イー・シー  
代表者 代表取締役社長 山口 康秀  
所在地 上越市上中田1178番地  
設立 1984年  
社員数 60人  
事業内容 プラント向け配管資材販売、公共・民間土木、下水配管資材販売、住宅給排水設備・衛生・空調設備工事設計・施工等

会社名 株式会社エム・イー・シー・テクノロジー  
代表者 代表取締役社長 山口 康秀  
所在地 上越市上中田1178番地  
設立 2004年  
社員数 111人  
事業内容 半導体製造装置販売、半導体・液晶製造工程の付帯設備および消耗パーツの販売、半導体製造装置請負メンテナンスおよびパーツ洗浄、半導体製造装置メーカー代行メンテナンス、半導体製造装置開発、半導体製造工場配管ライン工事・設計・施工等

### ■ 会社の沿革についてお聞かせください

現在、当グループは配管資材等を販売する親会社エム・イー・シーと、半導体製造装置の消耗部材等

を販売するエム・エー・シー、テクノロジーの2社で構成されています。

エム・エー・シーの設立は1984年です。もともと配管資材を販売する商社に勤めていた私の父であり、現会長の山口昭夫が、そのネットワークとノウハウを活かし、会社を立ち上げました。

現在も、工場やプラントの配管システムを支える銅管やバルブなど機器・資材のほか、民間・公共工事における土木資材、建築資材等を取り扱っています。

一方、半導体製造装置の消耗部材等を扱うようになったのは、エム・エー・シーを設立してまもなくです。

1980年代から90年代前半にかけて、日本の半導体業界は最盛期を迎えていました。半導体を製造するための装置は日進月歩で、積極的に設備投資も行われていました。その一方で、当時は半導体製造装置のメンテナンスに特化した業者は少なく、消耗部材を専門に調達する正規代理店や商社は、ほとんどありませんでした。それぞれニッチな分野だったと言えます。

そして、私たちの地元である上越地域では、当時から半導体関連の工場が多かったことも幸いしました。創業まもない私たちは、お客さまのご依頼に応えるべく、半導体製造装置の修理および部材の調達等の対応を積極的に行うようになりました。

その後、2004年に会社を分割して、エム・エー・シー、テクノロジーを設立しました。現在では、半導体にとどまらず、液晶、医療、ソーラーやLED



▲上越市にある本社

<b>営業部</b>	～スピード対応、コストダウン、品質サービス～ <b>安心と信頼関係のベストパートナーへ</b> 高品質に欠かせないパートナーであり続けるために、各種資材のソリューションもとして展開いたします。
<b>セールス事業部</b>	～半導体、液晶、医療、ソーラー、LEDの製造装置用の消耗部材から製造装置まで～ <b>製造業を支える力となります！</b> 人から人、モノからモノをつなぎ、コストダウンの展開いたします。
<b>フィールドソリューション事業部 プロダクト部</b>	<b>現場の課題をお客様とともに解決します。</b>
<b>フィールドソリューション事業部 メンテナンス部</b>	<b>現場の課題をお客様とともに解決します。</b>
<b>洗浄再生事業部</b>	<b>よりきれいに、より新しく、どんな部品も洗浄・再生します</b>

など幅広い製造装置の消耗部材を扱っており、装置の修理だけでなく、付帯する製造装置の設計・施工なども手掛けています。

また、営業拠点は甲信越、関東、北陸、近畿、山陽、九州の全国10か所、海外2か所に設けています。お客さまの工場や生産現場の近くに営業所があることで、急な注文や修理にも迅速に対応でき、お客さまから高い信頼をいただいております。

## ■ 具体的な事業内容についてお聞かせください

現在、当グループには「営業部」「セールス事業部」「フィールドソリューション事業部 プロダクト部」「フィールドソリューション事業部 メンテナンス部」「洗浄再生事業部」の5部門があります。

具体的に申し上げますと、先述したとおり、「営業部」では工場やプラントの配管資材、様々な土木資材および建築資材等を販売しています。

また、「セールス事業部」では、半導体や液晶などの製造過程で使用される薬液やガスなど消耗部材等を幅広いネットワークを活用して調達し、販売しています。

一方、「フィールドソリューション事業部 プロダクト部」では、お客さまの仕様に合わせた装置開



◀▲お客様の仕様・要望に合わせた装置の開発・設計



▲洗浄ショットブラスト作業



▲薬液供給装置



▲洗浄薬液槽



▲洗浄組立検査

発や設計、製作を行っています。これまでに製作した装置は、使用する薬液に適した部材・機器を選定するための薬液供給装置、半導体等の製造工程における洗浄装置などです。また、工場の新設・改造に伴う配管工事なども請け負っています。

そして、製造装置のメンテナンスを行っているのが、「フィールドソリューション事業部 メンテナンス部」です。

その一例として「真空チャンバーのクリーニング」について説明します。半導体の製造工程では、ウエハ基盤に薄膜を形成する、微細加工を施すなど、真空の状態で行う工程が多くあります。その真空空間を作り出す容器のことを「真空チャンバー」と呼びますが、様々なガスや薬品を使用するので、真空チャンバーの内壁に徐々に微細な汚れや塵が付着していきます。それを放置していると、そのうち付着物が剥離し、製造するウエハ基盤に混在してしまいます。ウエハ基盤はナノレベルの塵が混在するだけで不良品になるので、1週間に1～2回の定期的なクリーニングが必要になります。しかし、社内でクリーニ

ングを行うと、労力と時間がかかります。そこで、当社のような保守事業を得意とする会社が定期的なメンテナンスを行うことで、短い時間で効率的に作業し、工場のラインが停止することによるダウンタイムコストを低減することができます。

さらに、近年需要が高まっているのが、部品の洗浄・再生です。汚れた部品をきれいに洗浄して再利用することで、新しい部品と交換するよりも低コストで済むというメリットがあります。

そうした需要に応えるために、当社では「洗浄再生事業部」を設け、お客様の工場から半導体・液晶製造装置や付帯設備の部品を預かり、汚れの種類や部品の材質に合わせて洗浄したり、オーバーホール（部品を分解、清掃点検して、新品時の性能状態に戻す）を行っています。

現在では、国内4か所（新潟県上越市、石川県、熊本県、兵庫県）に洗浄工場を構え、全国に向けてサービスを展開しています。

## ■ 今後の展開をお聞かせください

現在、製造装置に必要な消耗部材などの販売が当社の売上の大きなウェイトを占めています。今後は、こうした商社としての機能だけでなく、修理・メンテナンスや、ものづくりの技術も強化していきたいと考えています。

そのためには、各々の分野で技術レベルの向上が重要です。例えば、装置部品の洗浄においては、現在はドライ洗浄とウェット洗浄が中心ですが、極めて高度な洗浄が求められる部品においても、要求される水準を満たせるような洗浄技術を目指していきます。

また、機械の修理・メンテナンスについても、新たな技術や知識を習得して自社で修理可能な領域を広げ、これまで外注せざるを得なかった複雑な装置の分解・修理、メンテナンスにも対応していきたいと考えています。

一方で、2021年4月に新潟市北区にある(株)今井工業所が当グループの仲間入りをしました。同社は、搬送や出荷ラインにおける自動運搬機や自動組立機など自動装置の開発設計や加工組立を得意としています。昨今、生産性向上を図るための省人化や省力化に取り組んでいるお客さまはたくさんいらっしゃ

います。同社の技術は、そうしたお客さまが抱える課題の解決につながると思います。

グループ全体で総力をあげてお客さまの悩みや課題に対して真摯に向き合い、取り組んでいきたいと思っています。

## ■ 新たな取り組みとして、蚕の飼育も始めたそうですね

国や大学および民間企業が参加する、「蚕」による医薬品開発を目指すコンソーシアムに参画し、試験的に蚕の飼育を始めました。現在ではそこから派生し、新たな食料としての「蚕」を育てています。

これからの食糧事情を鑑みると、気象変動などから世界的な食糧不足が危惧されています。大量の穀物を餌として必要とする牛や豚など動物性タンパク質に代わる食材として、現在注目されているのが、コオロギなどの「昆虫食」です。その中で、良質なタンパク質を持つ蚕も十分な代替食になるであろうと期待されています。

エム・イー・シーでは、上越市（旧板倉町）の耕作放棄地を利用して餌となる桑の葉を育て、1万頭ほどの蚕を飼育しています。桑の葉が育たない冬期には、桑の粉末に農家から出るくず米を混ぜた人口飼料を与えます。

中山間地の課題である耕作放棄地を有効活用すること、廃棄されるくず米を使い食品ロスを防ぐことなどから、地域の問題解決および環境保護の双方に貢献できる持続可能な社会に向けた取り組みであり、長期的な視野で進めていきたいと考えています。（2022年5月取材 柴山、神保）

### 耕作放棄地を利用して蚕を飼育



耕作放棄地で蚕の餌となる桑の葉を育て、蚕を飼育。持続可能な循環型社会を目指す